

遊歩者論・再考

近森 高明

1 観察者と陶醉者

多くの術語ないし概念がそうであったように、W・ベンヤミンの「遊歩者」もまた、新奇な言葉としてもはやされ、気の利いたスパイスとして好んで文章にとりこまれ、やがては飽きられ、陳腐化するという、ひととおりの流行のプロセスを通過したようにみえる。人びとはつぎなる流行語へと飛びうつり、「遊歩者」という言葉は早くも賞味期限の切れた術語、あえて取りあげるのも気恥ずかしい用語として、忘れ去られようとしている。そうした言葉である「遊歩者」に、いまさらこだわる意味はあるのだろうか。だが考えてもみよう。人びとの意識から抜け落ちて忘れ去られたもの、時流にあわず見捨てられたもの、商品世界から脱落したキッチンやボロ屑などにこそ、むしろ現在を照らすアクチュアリティが潜んでいるのだと期待をよせたのは、ベンヤミンその人であったのだ。とするなら、使い古され、いまや捨てられようとしている「遊歩者」という言葉に、いまだからこそ、あえてこだわってみる意義があるはずではないだろうか。

再考にあたり、このような方法をとってみよう。まず遊歩者という概念が、これまで扱われるなかで陳腐化されてきた道筋を追ってみるのである。言葉が使い古される、そのプロセスを追うことでみえてくるものがある。すなわちその道筋が押しつぶし、抑圧し、否認してきた次元を逆に照らしだし、そこから遊歩者という概念の、いまだ十全に展開されていない可能性を引きだしてくるのである。もう少し具体的にいう。遊歩者という概念を平板にしてきた、もっとも責任ある議論は、おそらくモダニティ論——すなわちD・フリスビーやM・バーマンに代表される、社会学や文学、都市論などの領域が交錯する地点で、モダニティの都市経験とは何かを考察してきた一連の議論——であると考えられる。モダニティ論の罪はひとえに、遊歩者を都市の「観察者」として理解してきた点にある。周囲の状況から距離をとりつつ、街路空間のパノラマ的眺望を享受する「観察者」としての遊歩者は、モダニティと都市経験の関連をあつかう都市論に頻繁に登場してきた。たとえば典型的にはこういう具合である。「遊歩者」とは、一九世紀初頭にパリに現われ、世紀の半ばには消えていった一群の人びと、都市の中で退屈を持て余し、日常的な生活や人間関係から超然として、路上で見出されるさまざまな事物を観察し、鑑賞する、ブルジョワ階級の人びとである」(若林 一九九九: 220-1)。

こうした遊歩者の理解がぴったりとあてはまる社会学的文

脈を構成するのが、G・ジンメルのもダニティ論である。「大都市と精神生活」(1903)でジンメルは、大都市の生活がもたらす数々の刺激、交通や経済、社交生活の速度と強度により、都市居住者たちの神経生活が高揚すると指摘している。そしてその結果、彼らの心的生活は主知主義的かつ悟性的な性格をもつようになるという。ジンメルの指摘するような、感情ではなく知性に重心をおいた生活態度、それは、周囲から距離をとりつつ、対象を分析し、判断し、操作的にかかわるという点で、「観察者」としての遊歩者の態度と重なりあうだろう。こうした文脈にあって、ベンヤミンがとりあげる数々の装置、パサージュ、パノラマ、万国博覧会などは、もっぱら視覚的装置として解釈されることとなる。一九世紀に勃興し、進展していった産業資本主義と接続して、それらの装置は、欲望の対象としての商品が魅惑的に並べられる幻像の世界、視覚的なフェイッシュの場合と、人びとを誘い込むための装置として作動したというわけである。

このような文脈で理解される「観察者」としての遊歩者は、いわば街路に降りたった近代的主観Ⅱ主体にほかならない。観察する遊歩者は街頭にいる他の人びと、たんなる群衆とは区別されるような、認識論的・存在論的な特権性をそなえる。周囲に安全かつ清潔な距離を保ちつつ、遊歩者は、街路上の事物なり人物なりを観察し、鑑賞し、解読するわけである。時間を持てあましたブルジョワ階級の男性として、遊歩者は

一見したところ無為であるかにみえるが、怠惰なその外見の奥底にはしかし、張りつめた注意力が隠されているとされる。それは探偵や研究者、猟師などと類比される側面である。気取られぬよう犯人を追う探偵のように、獲物をねらう猟師のように、遊歩者はひそかに目を光らせているのだ。あるいは証拠を収集する研究者のごとく、ふつうなら見過ごされる小さい手がかりを拾い集め、遊歩者は、ある一定の意味をもつ全体的配置を組みあげる。そうした遊歩者にとって都市の街路あるいはパサージュは、ときに室内となり、ときに風景となるといわれる。それはつまり街路が、しつらえられた娯楽・商業施設のように、無害で安全な圏域であることを示しているだろう。

もダニティ論の理解する遊歩者は、ひとつの〈眼〉に還元されているといつてよい。都市空間を自在に往来できる、街路に偏在する特権的な〈眼〉——それがもダニティ論の理想とする遊歩者の姿である。もダニティ論が遊歩者の原型とみなすのが、ボードレールが称揚した画家コンスタンタン・ギースであったことは、この点でひじょうに示唆的である。一時的な流行、逃れやすいイメージや印象、そのような大都市の文化現象をつくりあげる表層的な断片の数々を目ざとくつかみとり、素早く水彩のデッサンに仕上げてしまう画家の〈眼〉こそが、もダニティ経験の理想的な主体なのである。もダニティ論のこうした理解からは、しかし、あることながら

が決定的に抜け落ちてしまう。なるほど遊歩者は一方で、そうしたなかば特権的な「観察者」として描かれている。だがベンヤミンのじつさいのテキストでは、遊歩者はそれとは別の姿をとることもある。ベンヤミンは遊歩者を、麻薬を吸飲したかのような歪んだ知覚や、不可解なイメージ、謎めいた文字像などを契機として、街路で陶酔的状态に入りこむ存在としても描きだしているのだ。たとえばこのような断片が『パサーージュ論』にはある。

長い時間あてどもなく町をさまよった者はある陶酔感に襲われる。一步ごとに、歩くこと自体が大きな力を持ち始める。「……」次の曲がり角、はるか遠くのこんもりした茂み、ある通りの名前などがもつ磁力がますます抗いがたいものとなってゆく。「……」禁欲的な動物のように彼は、見知らぬ境界を徘徊し、さいごにはへとへとに疲れ果てて、自分の部屋に——彼によそよそしいものに感じられ、冷ややかに迎え入れてくれる自分の部屋に——戻り、くずおれるように横になるのだ。(V: 525 [M1, 3])

不可思議な夢のような形象に誘われ、陶酔し、街路に迷い、何ものかに引きずられるようにして、一晩中、街のなかを彷徨しつづける遊歩者——それはつまり、「観察者」ならぬ「陶酔者」としての遊歩者である。超然とした態度を誇る、自在

に動きまわる〈眼〉としての遊歩者とは対照的に、陶酔する遊歩者は、構成的主観としての権能をおびやかされ、意志的主体としての確固たるポジションを剥奪されている。しかしその不安な受動的ありよう、自己をかたちづくる明確な輪郭がぼやけ、外部に無防備にさらされる、その一時的な主観Ⅱ主体の開かれにおいて、陶酔する遊歩者は、ふだんならやりすごされる、都市のある異質な次元を経験しているのではないだろうか。目覚めた意識をもつものにはかえって覆い隠され、歪められた知覚をうけとる「陶酔者」にこそ捕捉されることながら、とつぜん啓示のように降りかかる真実の瞬間——ベンヤミンのいう「世俗的啓示」——というものがあるのではないか。ベンヤミンじしん、こうした陶酔的経験の可能性を複数の方向で持続的に追究していた。たとえば、子供特有の知覚形式にこだわっていたこと。麻薬による知覚変容に興味をいだき、みずからもハシツシュの吸飲実験を重ねたこと。あるいは、シュルレアリスムが実験的に生み出す知覚の歪みに関心をもっていたこと。こうしたベンヤミンの思考の軌跡からみても、彼のテキストに登場する陶酔経験には、無視しえぬ重要な意義がこめられているのはあきらかであるだろう。

モダニティ論が先導してきた陳腐化のプロセスにより、押しつぶされ、抑圧され、否認されてきたのは、こうした「陶酔者」としての遊歩者の姿である。そしてひとしきり「観察

者」としての遊歩者の概念が流通し、手垢がつき、もはや見捨てられようとしている現在、ようやく「陶酔者」としての側面に光をあてる絶好の機会がおとずれたのだといえる。

本稿の目的は、従来のモダニティ論において「観察者」として理解されてきた遊歩者の概念を、むしろ「陶酔者」として捉えかえしてみると、街路での都市経験の理解に寄与しうる、どのような展開可能性がみいだせるのかを検討することである。とはいえ、もちろんベンヤミンが念頭におく街路は、ごく限られた性質のもの、つまりは一九世紀パリの街路であり、それ以上のものではない。それゆえ当然ながら「ストリートの人類学」という構想にたいして、そうした限定的対象をあつかうベンヤミンの思考にかかずらうことが、どのような理論的、ないしは実践的な意義をもちうるのかという疑問があるだろう。しかし、遊歩者を「陶酔者」として捉えかえずという本稿の問題設定は、街路Ⅱストリートでの人びとの営みや出来事に立ち会う方法という、それこそ「ストリートの人類学」に固有の問題系を考えるうえで、少なからず示唆するところがあるはずである。街路に参与すると標榜しつつも、知らず知らずに距離をとり、安全圏から対象に操作的にかかわる「観察者」としてのポジションを疑うこと。その近代的主観Ⅱ主体にそなわる認識論的・存在論的な特権性を、いわば内側から解きほぐし、ゆるやかに開いてゆくこと。そしてそれとは別様のしかたで、眼前の街路のさまざまな営

みや、種々の出来事に立ち会い、またそれとは別様のしかたで街路に〈在る〉こと。「陶酔者」としての遊歩者にかかわるベンヤミンの思考からは、そうした街路Ⅱストリート現象をめぐる認識と存在の方法を、ひとつの示唆として受けとることができよう。

2 夢・陶酔・シュルレアリスム

それにしても、陶酔という言葉はやや危うい傾きをもっている。陶酔経験について語ることは、ともすれば、一連の通念的なイメージを呼び起こして、近代的主観Ⅱ主体の解体という事態を感覚的に描きだすことに終始しかねないからである。たとえば、知覚と感覚の錯乱がもたらす幸福感のうちに身をゆだねること、自他の区別が失われた融即の状態に溶け込むこと、多重的な身体感覚のカオティックな混濁状態のうちには回帰すること、などなどを、陶酔という名のもとにイメージとして提供することはたやすい。けれどもそのようなことをしても、理論的には何もいったことにはならない。あるいは陶酔的な経験がある種の〈外〉の経験として、異質な外部の経験としてあつかうことは、むしろ理論的に危険な振るまいである。なぜならそうすることは、〈内〉と〈外〉の境界を構成している原理的な構図そのものを、遡及的に肯定し、強化してしまうからである。それゆえここで必要なのはむしろ

ろ、陶酔経験を理論的に意味のある事態として把握する、そのための有効なツールを用意することである。本稿ではそのツールを、S・フロイトの精神分析にもとめたい。

ベンヤミンの解説にフロイトを参照するというのは、とくべつ突飛なことではない。やがてあきらかになるようにベンヤミンの思考、とりわけ言語と記憶をめぐる思考には、精神分析の思考と重なりあい、交錯するような要素が数多く含まれている。そうした理論的要素を解説格子とすることで、ともすれば神秘主義的な解釈もされがちなベンヤミンの思考を、他の思考と通約可能な平面に置きなおすことが可能となる。そしてベンヤミンの都市論的思考を、他の理論家たちのそれと比較しつつ、互いに並行する概念の連関、モテーフの相同性を発見的に確認するといった作業もまた、精神分析を補助線とすることでより説得力をもつようになるだろう。

ベンヤミンとフロイトとをつなぐ理論的線分を探り、その内実を検討するにあたって、まずは「夢」という論点に照準をあわせてみたい。夢の理論は、フロイトからの思想的継承という点では、誰しもが第一に思い浮かぶ主題であるが、じつと遊歩とは「まどろみのリズム」であると表現したり（『162 [D2a, 1]）、遊歩者を「阿片使用者、夢見る人、陶酔した人」と同列に並べたり（II: 307）するなど、ベンヤミンは遊歩者の陶酔経験を、しばしば「夢」をみている状態と同一視している。なるほど陶酔する遊歩者は夢うつつであり、半醒

半睡のまどろみのうちにあるという表現は、感覚的にも納得しうるものである。だがここで、遊歩者を「夢見る人」ととらえるとき、ベンヤミンのうちには、二つの異なる理論的文脈があることに注意したい。

まず、遊歩者はまどろみのリズムを刻むというとき、それは一方で、何ものかの幻に騙されているというニュアンスがある。ここで参照されているのは、資本主義による商品世界の幻像というモテーフ、マルクス主義とフロイト的な夢の理論を接合した（夢Ⅱ全体的イデオロギー）とも呼ぶべき文脈である。遊歩者は投影されるスクリーンの虜となり、魅惑的な夢の世界にとらわれ、その現実的な外部としての投影装置（およびそれを支える社会経済的条件）の存在に気づくことはない、などなどという理路が、その文脈をたどった先にあらわれてくるだろう。だが遊歩と夢の関連性をめぐっては、それとは区別される、もうひとつの文脈がある。遊歩者が街路で不意に夢のようなイメージ、象形文字めいた不可解な文字像に出会い、その読み解きたい謎に誘われて、現実のもうひとつの次元を垣間見るといったニュアンスであり、こちらのほうは、L・アラゴンやA・ブルトンなどのシュルレアリスムに由来している理論的文脈である。（夢Ⅱ全体的イデオロギー）と対照させる意味で、こうした文脈を（夢Ⅱ断片的イメージ）と名付けておきたい。

これら二つの文脈は、ベンヤミンの思考のなかで互いに密

接に関連してはいるのだが、明確に区別しておいたほうが理論的には有意義である。というのも、ベンヤミンの思考の軌跡や、そもその資質からいって、フロイトと同型的な思考が十分に活性化されるのは、後者の〈夢Ⅱ断片的イメージ〉という理論的文脈においてであるのだが、安易に二つの文脈を混ぜてしまうと、その思考の特性が十分にみえなくなってしまうからだ。ここで文献学的な注釈を入れておくと、『パサージュ論』にベンヤミンがかかわったのは十三年間、一九二七年から一九四〇年にかけてであるが、そのうち二つの研究段階が区分できる。第一段階は一九二七年から一九二九年にかけてであり、この段階では、ベンヤミンは「パリのパサージュ。弁証法の妖精の国」と題するエッセイを書く予定であった。その動機のひとつとなったのが、アラゴンの『パリの農夫』に代表されるシュルレアリスム文学による影響である。『パサージュ論』のモテーフである、古びたものの「革命的エネルギー」に着目したのは、シュルレアリスムが最初であったとベンヤミンはいふ。またアラゴンがパサージュ・ドロペラを「人間水族館」と表現し、青い微光のなかに事物が沈んでいる夢幻的な情景を描いたことから、ベンヤミンはパサージュについての、端緒となるインスピレーションをえたのだという。

つづく第二段階、一九三四年から一九四〇年にかけて、ベンヤミンの思考の軸足はマルクスの理論へと移動する。ホル

クハイマーやアドルノからの助言もあり、ベンヤミンは当初の「狂想曲」めいた叙述法を捨てて、歴史の理論、歴史的唯物論に真剣にとりくむ必要を感じるのである。その結果としてパサージュ論は、商品の物神的性格という概念を中心として、あらたに全体の構成が組みかえられることとなった。『資本論』に由来する「幻像（フアンタスマゴリー）」という用語を積極的に使いはじめ、フロイトの夢の理論をマルクス主義の図式に接合しようとする理論的意図は、この段階で生じてくる。その構図のもとでベンヤミンは、商品のフェティシユ的性格が幻像たる「夢」として現象しつつ、人びとがその魅惑的な「夢」のなかに落ちこんでゆくという時代状況の把握をおこなうのである。たとえば、『パサージュ論』にはこのような記述がある。一九世紀は個人の意識が反省的となる一方で、集団の意識は眠りに沈みこんでゆく「時代〔時空間〕（Zeitraum）」すなわち「時代の夢（Zeit-traum）」である（V: 491 [K1, 4]）。さらに「資本主義は、夢をともなうあらたな眠りがヨーロッパを襲うひとつの自然現象であり、その眠りのなかで神話的諸力の再活性化をともなうものであった」（V: 494 [K1a, 8]）。

けれども先に述べたように、都市経験の理解という点で理論的に可能性があるのはむしろ、シュルレアリスムに由来する文脈であると考えられる。一方で〈夢Ⅱ全体のイデオロギ―〉という文脈では、夢の世界は、ひとつの均質な全体的構

建築物として想定され、都市の居住者たちがあたかもひとつの人格として、そうした夢を分有しているかのような理解が生じる。陶酔する遊歩者は、その場合、都市居住者の集合的無意識と、陶酔状態のうちで融合していることになるだろう。

アドルノが批判したように、こうした理解はユング風の集合的無意識という、非歴史的かつ無媒介的、実体論的な概念を呼びこんでしまう。他方、〈夢Ⅱ断片的イメージ〉という文脈では、個々人としての遊歩者が、街路を散策するなかで偶然に不可思議なイメージに出会い、もしくはそれらに呼びかけられ、まどろみのなかへ、陶酔状態へと入りこむという理解へと結びつく。そのとき陶酔的な経験とは、何らかの虚偽的な幻像へとらわれる経験というよりも、むしろ自閉的な日常的現実に亀裂をあたえ、一瞬のイメージの閃きのうちに、ある種の真実の様相をつかみとる経験といったほうに近いはずである。「この認識可能性に満ちた今において物事はその真の――そのシュルレアリスティックな――相貌をこうむるのである」(V: 579 [N3a, 3])。

以上のことから本稿では、遊歩者の陶酔経験について精神的分析の用語系に依拠しつつアプローチするにあたり、〈夢Ⅱ全体的イデオロギー〉ではなく〈夢Ⅱ断片的イメージ〉という理論的文脈を重視することとしたい。この文脈で目を向けるべきは、街路の陶酔経験についてベンヤミンが、夢を見ることと同時に、シュルレアリスムの陶酔や、ハシツシュ吸入

による知覚の歪みと重ねて考えていることである。こうした問題系列を束ねているのは「類似性」の概念である。たとえば、このような断片が『パサーージュ論』にはある。

ハシツシュによって生じる二つの物が同じに見える重層現象を、類似性の概念によって捉えること。「……」目覚めた意識にとつては、類似性というカテゴリーはきわめて限定された意味しかもっていないが、ハシツシュの世界にあつては無限の重要性をもつ。というのもハシツシュの世界においてはすべてが顔なのだ。そこではすべてが身体的な迫真力をもつてあらわれ、その度合いは非常に強いため、顔の場合と同じく相貌があらわれ出るのを探し求めることが可能となる。「……」真理はなにか生けるものになるが、このように真理が生きるには、命題と反対命題が相互に入れ替わることによって、相互に思考の対象としあうようなリズムのなかでのみである。(V: 526 [M1a, 1])

この断片を踏まえるなら、遊歩者の陶酔的な経験は、ハシツシュ吸引者のように街路のあらゆる事物に「顔」を認めること、言いかえれば、ある事物に類似した別のイメージが不意に喚起され、事物のうえに重層し、見出された別の相貌がさらなる連想を無限に繰りひろげてゆく、そのようなイメージ

の迫真的な喚起力に身をまかせつつ陶酔すること、と言いかえられるだろう。だがそうした遊歩者の陶酔経験に、類似性という概念は具体的にどのようなかかわっているのだろうか。またその結びつきに、〈夢Ⅱ断片的イメージ〉という理論的なラインは、どのように絡んでいるのだろうか。以下では、類似性を含むイメージが知覚の多重性を引き起こし、それを契機に遊歩者が陶酔の状態に入りこむという事態について、より具体的に考察するために、ある特異な主題に着目することとしよう。それは「街路名」の問題である。遊歩者が街路名に魅惑され、陶酔するという状況を、ベンヤミンは『パサージュ論』の断片群P「パリの街路」で何度も描きだしている。この街路名がもつとされる魅力の秘密を、ベンヤミンの思考のうちにとどることで、同時に、類似性にかかわるベンヤミンの思考の履歴を概観してみることとしよう。

3 街路名のもたらす陶酔

街路名はなぜ独特の魅力をもつとされるのか。第一に注目されるのは、街路の名前において重要なものは、名の指ししめす現実的な対象、つまり物理的な街路ではなく、言葉としての名そのものの感覚的な印象、あるいはそれが喚起する視覚的ないし音声的なイメージにほかならないという点である。

「街路名にひそむ感覚性。それは普通の市民にとってどうに

か感じとれる唯一の感覚性である」(V: 645 [P1, 10])。

こうしたヴィジョンを引き起こすことができるのはたいていの場合、麻薬に限られている。ところが実際には街路名もこうした場合に、私たちの知覚を押し広げ、多層的にしてくれる陶酔を起こすものとなる。街路名が私たちをこうした状態へと誘ってくれる力を喚起力と呼びたい。——だがそういっただけでは言い足りない。なぜなら連想ではなくイメージの相互浸透がここでは決定的だからである。ある種の病理現象を理解するにはこの事実を想起しなければならない。何時間も夜の町を徘徊し、帰るのを忘れてしまうような病気の人は、おそらくそうした力の手に落ちたのである。(V: 645-6 [P1a, 2])

このような記述もある。「街路名が表わしている真の性格が認識されるのは、街路名を規格化するために行われる改名提案と比較してみた場合である」(V: 647 [P2, 4])。「市当局は、パリの他のすべての地区と同じように、この地区の家々にも番号をつけた。しかし、この地区の住民のだれかにその住所を聞くと、その人は、冷たい、公式の番号ではなく、自分の家についている名前を答えるだろう」(V: 649 [P2a, 4])。ここで大切なのは、街路名が番号化されると、「純粹に響きの上で作用する」街路名の「名」としての性格が失われてしまう

という点である。街路を歩く者に感覚的なイメージを喚起し、目の前にある現実の街路と想起されたイメージを二重視させる街路名の「名」としての力、それがここでは、街路の改名計画と対比して強調されている。

このように見てくるなら街路名がまさに「名」であること、他の種類の語ではなく、端的に「名」であること、この点が街路名の魔術的な力の秘密におおきくかかわっているようである。「名」としての街路名は、純粹に感覚的なイメージを歩行者に呼び起こし、そのイメージは目の前の物理的な街路と相互浸透しあう。あるいは、左右に別々の画像がおかれたステレオスコープを覗きこんだときのように、両者は二重映しになる。現実の街路と街路名（の喚起するイメージ）の二重性——。このようにとらえるなら、現実の物質的な街路のネットワークから構成される都市とは別に、それぞれの街路につけられた名前の集積としての言語的な都市というべきものが想定されてくるだろう。こうしたことは、つぎのような断片で集約的に示されている。

普通ならごくわずかな言葉、すなわち特権階級にある言葉だけにとっておかれたことがらを、都市はすべての言葉に、あるいは少なくとも多くの言葉に可能にした。すなわち、名という高貴な地位に格上げされることである。

この言語における革命はもつともありふれたもの、すな

わち街路によってなしとげられた。街路名によって、都市は言葉の宇宙となる。(V: 650 [P3, 51])

それでは、なぜ「名」は他の種類の言葉とは異なって「高貴な地位」にあり、特異な魔術的な力をもっているのだろうか。また、街路名の喚起する感覚的なイメージとは、具体的にはどのようなメカニズムで成立し、いかなる知覚上の影響を歩行者にあたえるのだろうか。これらについてより詳細に検討するには、『パサージュ論』の断片群Pをはなれて、より広い視野からベンヤミンの思考をたどっていく必要があるだろう。

*

「名」の問題をめぐるベンヤミンの考察として、まず参照されなければならないのは、初期の魔術的な言語論「言語一般および人間の言語について」(1916)である。そこでは『創世記』の言語論的な観点からの読解より、墮落した人間の言語、すなわち現実社会における言語の特質が、理想的な楽園の言語との対比をつうじて示されている。まずはじめに、楽園の言語は、完全な認識をなす言語、すべての事物を内的かつ直接的に認識する言語であったとされる。それは「名」言語(Namensprache)であり、名による認識の完全性は、神の創造する力と認識する力とに由来している。純粹な媒質である名「言語のもとで、楽園の人間は、事物を直接的に認識しつつ、至福の状態で休らうことができたのである。ところが、人間

は善悪の認識を知ることにより、そうした楽園の言語から失墜してしまうことになる。墮落した人間社会において、言語はもはや純粋な媒質ではなく、たんなる外的な意味の伝達手段にすぎなくなってしまう。「名」の永遠の純粋性を侵害した結果、人間は事物との透明な関係から疎外され、道具的な言語からなる自閉的な意味の世界のうちで、むなしい「お喋り」を繰り返すことになったのである。

こうした初期の言語理論において、「名」は、原初の楽園の言語の直接性の残滓をとどめている特殊な言葉として把握されている。「名」が他の種類の言葉とはちがった「高貴な地位」にあるというのは、この意味においてである。ここで批判対象として念頭におかれているのは、言葉を慣習によって措定された事物の記号であるとみなす「市民的言語理論」であるが、これは広くとらえるなら、構造主義的な記号論にまで引きつがれた道具的な言語観に対する批判と解釈することができる。すなわち、言葉をたんなる意味の担い手、概念を指示する透明な記号、あるいは世俗的な伝達の道具とみなす言語観に対して、「いわば人間が言語による最初の分節の際にカオスのなかから呼びだした事物の根源的認識にかかわるような言葉、事物のもつそうした原初の鮮烈なイメージの総体をことごとく自らの内に凝集したような言葉」(道籟 1997: 100)としての「名」を対置しているのである。初期の言語論におけるこうした議論は、しかし、やや神秘主義的な傾きをもつ

ているといえよう。ベンヤミンのより後の時期の言語論では、同じように「市民的言語理論」への批判的な観点がみうけられるのだが、それは、失われた「直接性」という神秘主義的な論点ではなく、人間の「模倣」能力の喪失という歴史的な側面からアプローチされている。そこで、言葉を透明な伝達の記号とみなす見方に対置されるのは、言語そのものの文字像あるいは音声としての物質性である。

一九三三年に書かれた二つの論文「類似したものについての試論」と「模倣の能力について」のなかで、ベンヤミンは、人間の「模倣」の能力ないし「類似」をみてとる能力について考察している。ベンヤミンによれば、それらの能力は、人間のあらゆる高次の機能の基礎ともみなしうるものであるが、個体発生と系統発生の両面にわたって、人間の発達とともに失われてきたという。一方において、子供時代の遊びには、模倣の行動様式が浸透しているのが観察される。他方、系統発生的には、模倣の能力は人間の歴史の発展過程のなかで次第に弱まりつつあることが指摘できる。「というのも、明らかに近代人の感覚しうるしるしの世界 (Merkmale) は、古代の諸民族によく知られていたあの魔術的な交感や類推のうちの、ほんのわずかな残滓しか受け継いでいないからである」(II: 211)。しかしながらベンヤミンは、「非感性的な類似 (unsinnliche Ähnlichkeit)」という概念に着目しつつ、模倣の能力は人間の言語のなかに受け継がれていると結論づけ

る。「言語は、模倣的な振舞い方の最高の段階であり、非感性的な類似の最も完璧な記録保存庫であるといえるだろう。つまり、言語とはひとつの媒体であり、模倣によって「類似を生み出し理解する古き時代の力がこの媒体へと残りなく流れこみ、ついには、それらの力はそこで魔術の力を精算するに至るのだ」(II: 213)。

こうした「模倣」と「類似」をめぐるベンヤミンの思弁的な考察が、具体的なかたちをとって展開されるのは、二つの論文と同時期に書かれた回想記『一九〇〇年頃のベルリンの幼年時代』(1932-8)においてである。「個々の名前に子供時代の経験という一つの全体的な宇宙を通電させることよって成り立って」いるこの作品では、類似と謎に満ちた子供の知覚方法や経験形式があたうかぎり再現されている(Menninghaus 1986=2000: 101-2)。その再現の手段のひとつとしてベンヤミンは、子供がしばしばおこなう、言葉の響きの類似にもとづく連想を数多く登場させている。たとえば、シュテークリッツ (Steglitzz) という通りの名が、鳥の「ごしきひわ (Stieglitz)」に由来すると想像していたこと (IV: 248-9)。また、ブルーメスーフ (Blumes-Hof) という街路名がブルーメツーフ (Blume-zooF) と発音されていたために、そこにある祖母の家にはいると、まずプラツシュ製の花 (Blume) が目に飛び込んできたこと (II: 257)。あるいは、昔の童謡のひとつに「レーレン小母さん (die Muhme Rehlen)」

という人物が出てくるのだが、「この「ムーメ」なる語が私には何も意味しなかったもので、この人物は、私にとっては、「ムンメレーレン」(die Mummerhen) [「仮装したレーレン」の意] という精霊になってしまった」こと (IV: 260)。最後にあげたエピソードのあとには、つぎのような文がつづいている。

「この誤解のために、私の目に映る世界の様相が変わることになった。といっても、うまい具合に、である。この誤解によって、世界の内奥に通じる道が、いくつも教示されることになったのだ」(IV: 260-1)。言葉の響きの類似にもとづく「誤解」から、世界の様相が一変することになるというここでの論点は、透明な記号に還元されない言語の物質性と、それに関連する「名」の独特なイメージ喚起力を考えるうえで重要である。ある言葉の音声は「誤解」を引き起こすという現象は、言語を意味伝達的な記号とみなすかぎり、望ましくないノイズであり、言語の本質的な機能を阻害する事故でしかないが、子供にとっては、あるいは、類似関係を積極的に読みとろうとする者には、それは「世界の内奥に通じる道」が開かれる貴重な機会なのである。

4 歪曲された表象

さて以上では、街路名の「名」としての側面について、ベンヤミンの言語論をたどりつつその不可思議な力の源泉をさ

ぐつてきた。初期の魔術的な言語論において、原初の直接性の残滓をはらむ特殊な言葉として把握されていた「名」の特性は、より後の論考において、文字像や音声としての言語の物質性にかかわる特性としてとらえかえされる。こうした考えに照らしてみれば、たしかに街路名とは、物質性のきわだった言葉であることに気がつく。街路の名と現実の街路との関係はほとんど脈絡がなく、街路の名はしばしばまったく恣意的であり、無意味であるように見える。その点で、街路名は意味を担う充実した言葉というよりは、むしろ意味を抜き取られた言葉の残余、意味の指示能力をすでに喪失した言葉の骸骨とでもいうべき地位にある。言葉の残滓としての、音声ないし文字像としての、あるいはエクリチュールとしての街路名。それは謎めいた問いとして、歩行者に解読をうながす。ただしそれは、背後に読みとられるべき意味を隠したテクストというよりも、判じ絵や象形文字のように、あるいは夢の顕在内容のように、歪曲された表象として、読もうとする者にオリジナルのない翻訳を解読するような態度を強いるのである。

じつのところ、ベンヤミンの言語論（および記憶論）とフロイトの精神分析とが交錯するのは、この「歪曲」という概念においてである。ベンヤミンの文献学的な精読にもとづいて両者の記憶論の相同性を指摘したジクリット・ヴァイゲル（Weigel 1996）によれば、ベンヤミンは精神分析より無視し

えない影響を受けており、そこから得られたアイデアの中心にあるのは「歪曲」の概念である。その概念の影響は、ベンヤミンによる「非感性的類似」という概念の導入において徴づけられており、ヴァイゲルの見るところでは、この用語は、「無意識の言語のラインと言語魔術のラインが彼の理論的考察のうちで収斂する消失点」にほかならない（Weigel 1996: 130）。ベンヤミンがそれまで、ハシツシユ吸飲のもたらす陶酔や、子供特有の知覚、シュルレアリスムの実験的な現実描写といった問題系列のなかで重ねてきた思考、類似性というカテゴリーをめぐる思考は、フロイトの夢の理論——夢の顕在内容は（圧縮、置換などの夢作業により）歪曲された表象であるという理論——に接触することで、歪曲された類似性という問題圏へと収斂してくるのである。先に〈夢Ⅱ断片的イメージ〉という文脈と呼んでいたのは、まさにこうした類似の状態で歪められたもの、夢の表象の判じ絵的な性格をめぐる、フロイトからの理論的継承線にほかならない。

*

ここまで、街路で陶酔する遊歩者の問題をめぐって、その陶酔経験がもつ理論的意義を探るといふ目的から、フロイトの精神分析的思考と切り結ぶような要素に焦点をあてつつ、複数領域にわたるベンヤミンの思考の軌跡をたどってきた。まずは陶酔が、夢をみている状態と類比されることから、ベンヤミンの「夢」をめぐる理論的文脈を検討し、それが〈夢

「イデオロギー的全体」と「夢」断片的イメージ」に区別されること、そして、後者のほうにより重要な意義があることを述べてきた。ついで街路名がもたらす陶醉経験を具体的な手がかりとしながら、類似性というカテゴリーにまつわるベンヤミンの思考の軌跡をたどってきた。そのさいヴァイゲルの議論に依拠しつつ、フロイトの夢理論における「歪曲」の概念が、ベンヤミンの言語論（および記憶論）に重要なインパクトを与えていることを確認した。

それでは、このようなベンヤミンの陶醉する遊歩者をめぐる思考は、他の理論家たちによる都市論的思考と、どのような地平で結びあうのだろうか。先に言及したように、こうした通約可能な理論的地平を与えてくれるのが、本稿で準拠枠としてきた精神分析にほかならない。以下では、ある都市論のテキスト、街路の歩行者というベンヤミンに類似した主題をあつかい、なおかつ精神分析に部分的にないしは潜在的に依拠している、ある特定のテキストをとりあげて、ベンヤミンの思考と照らしあわせてみることにしたい。それはすなわち、ミシェル・ド・セルトーによる影響力のある論考「都市を歩く」(de Certeau 1980=一九八七)である。

ここでこのテキストをとりあげるのには、複数の理由がある。第一に、ベンヤミンと同様に街路での歩行という、日常の何気ない経験をあつかっていること。第二に、そうした経験のうちに、無意識的な機制が作用している状況を独特なし

かたで論じていること。さらに第三に、従来の読解においては、こうした無意識的なものへのド・セルトーの言及がしばしば等閑視されてきたこと。言いかえれば、ベンヤミンの遊歩者をめぐる議論と、ド・セルトーの議論とは、テキストの受容のされかた、ないしは限定的な理解のされかたが、きわめて類似しているということである。この点についてももう少し説明しておこう。

このテキストが熱心に受容されたのは、おもにカルチュラル・スタディーズの文脈においてであった。そこで強調されたのは、都市空間をグリッドに分割する一望監視的な権力的構成（「上からのまなざし」）にたいして、歩行者が創意にみちたレトリカルな歩行を繰りひろげる実践（「下からのまなざし」）のうちに、日常的な抵抗の契機をみいだすというモチーフであった。だがじっさいには、それは彼の主張の一部にすぎない。ド・セルトーはたしかに、自在に歩く抵抗的な歩行者という像を描いているのだが、それにつづけて、都市空間に伏在する神話的なものとかかわり、ないしは無意識的なものとの結びつきにより、ある意味で主体性が解体し、街路を「歩かされる」存在としての歩行者の姿をもとりあげているのである。だがこの論点は、既存の読解ではしばしば無視されてきた。街路の歩行者が無意識的に「歩かされる」という事態は、抵抗的実践を前景化しようとする観点にとつて、一見して不都合だからである。しかしド・セルトーのテクス

トから、そうした無意識に関連する側面を切り落とすことは、はたして正当であるだろうか。

ド・セルトーの論考はたしかに一方で、具体的な都市生活者の実践をとらえる視点を提供し、数々の生産的議論を生みだしてきた。だがそれは他方で、比喩としての「漂流」や「越境」を祝福し、抽象的かつ楽観的に抵抗を語ってしまうような言説の流行にもとりこまれる危険性を随伴してきた。自在に都市のグリッドを横断する歩行者だけをみようとする、そうした一面的読解にたいして、街路を「歩かされる」歩行者の姿を同一のテクストから抽出してみせることは、一種の脱構築的效果をもたらすはずである。

5 「都市を歩く」を読み直す

ド・セルトーの論考は三つの節から構成されており、それぞれ議論の照準する段階に対応している。第一節は「都市の概念から都市の実践へ」と題され、都市工学的な視線により都市を全体的な概念として把握する方向から、日常的な場面での微視的な実践に目を向けてゆく方向へと、都市研究のパースペクティブを転換する必要が論じられる。つづく第二節は「消えた足どりの話し声」として、歩行行為が発話行為とアナロジーで考察され、人びとの歩行の実践がシステムに對抗的なレトリックをもっていることが示される。ここまで

が、よく知られているド・セルトーの議論である。だがさいごに、第三節として「神話的なもの／ひとを「歩ませる」もの」がおかれている。都市空間に潜む神話的なものや無意識的なものが論じられるのは、この節においてである。

その節でまず言及されるのは、歩行と夢との類似性である。都市空間をねじ曲げ、ずらす歩行のフィギュールは、そのまま「無意識の象徴法」でもある。なぜなら、言説と夢とは同様の文体方式と転義法にしたがうからである。歩行の実践が発話行為と類比されるならば、それは一種の言語活動であるかぎり、同じく言語的な現象である夢の表象とも類比される。都市空間にみられる固有名という導入的事例について論じたのちに、ド・セルトーは、より一般的なレベルへと議論を展開してゆく。すなわち、都市にはたらく無意識的な象徴機構として三つの作用を呈示するのである。

こうして象徴をつくりなしてゆく結びつきのなかから、空間の実践と意味表現の実践を結びつける三つの作用が浮かびあがってくる（というより、できあがってゆくのかもしれない）。それらは、たがいに異なった（しかしつながりあった）三作用である。すなわち、信じられるもの、記憶にのこるもの、そして原初のもの、である。それらは、空間を自分のものにすることを「許して」くれるもの（あるいは可能にしたり、信じさせてくれたりす

るもの)、ひっそりと内奥にたたみこまれた記憶のなかからまたよみがえるもの(またはよび起こされるもの)、そして幼年期の(無言の)起源によって構造化され絶えずその刻印をおびているものを指ししめしている。こうした三つの象徴機構は、都市工学のシステム性を逃れるようなありかたで、都市の/都市にかんするディスクール(伝説、思い出、夢)のトポスをかたちづくっている。

(de Certeau 1980=一九八七: 223-4)

これら象徴機構の三つの作用について、相互の理論的な関連は明示的に説明されてはいない。しかし、三つの作用のいずれもが無意識の水準と密接にかかわっており、無意識に特有の言語活動を考慮に入れなければ、理解しえない現象であることはたしかである。これら三つの象徴機構は、精神分析の文脈におくなら、前意識系を特徴づける二次過程に対比される、無意識系を支配する一次過程に内属しているといえる。分節化された語が合理的な文法システムに制御される二次過程にたいして、そこから脱落した語は、意味内容を欠いたイメージや表象として無意識の一次過程へと取りこまれる。「信じられるもの」「記憶にのこるもの」「原初のもの」という三つの作用は、そうした一次過程の言語活動に結びついている。三つの象徴機構の作用が「都市工学のシステム性を逃れる」というのは、それゆえ、一次過程のイメージや表象が二次過

程の合理性を逃れているという事態と、理論的に並行的な関係にあるといえる。

それでは、三つの作用をひとつずつ検討してみることにしよう。第一に、「信じられるもの」について。ド・セルトーによれば、場所にまつわる物語や伝説は、信じさせる言説として、都市の固定的なシステムのうちに隙間ないし遊びの空間をつくりだす。それらは戯れを「許して」くれることにより、「そこを住めるものに変えてくれるのである」。信じさせる言説は「ローカルな権威」と呼ぶことができるが、全体主義的なシステムはそれを排除しようとし、物語や伝説を「迷信」とみなす。しかし、「ことばの遺物、忘れられた話や不透明な身ぶりにゆかりのある遺物たち」からなる無数の物語や伝説が、都市に散種されることによつてこそ、平準化する空間に窪地が生じ、都市は住みうる場所となるのである。固有名はそうした伝説の一種とみなされる。

第二に、「記憶にのこるもの」について。都市の記憶は断片的なカタチで方々に散逸している。ある場所の記憶が語られるとき、それは不在の現前のごときものとしてあらわれる。「ごらんさない、ここにあったんですよ……」こというように、場所を指ししめす言葉はもはや現存しないものを語るのである。ひとの住む場所は幾重もの層をもっており、いわば霊や影にとりつかれている。「場所は、奥深くたたみこまれた、とぎれとぎれの話であり、他人の読みおとした過去、先へ伸び

てゆくことができるのにじつとたたずんで、来るべき物語のように未来を待ちながら、判じ文字のようにそこに在る時間、そうして、身体の苦悩と快楽のなかにひそかに宿る象徴表現である」(de Certeau 1980=一九八七: 224-30)。

以上の二つの作用は、精神分析の理解する無意識の言語活動とどのように関連づけられるだろうか。まず「信じられるもの」は、語られた言葉の遺物であり、もはや明瞭な意味内容を喪失した呪文として、二次過程の合理的な記号秩序からもれおち、無意識の一次過程に取りこまれた謎めいたイメージと類比されうる。他方「記憶にのこるもの」は、場所のうちちに多層的にたたみこまれ、潜在的に保持されている過去を想起することであり、それは、一次過程にある象徴的なイメージが連想的に展開し、隠された記憶が無意識的に喚起される事態にパラレルなものと考えられる。

第三の作用である「原初のもの」は、これら二つの作用とやや異なるしかたで無意識の言語活動とかわっている。主体による空間の実践についてド・セルトーは、「結局そこにみてとるべきものは、さまざまメタファーのかたちをとった、原初的で決定的なひとつの経験の反復であり、幼児における母体との一体化からの分離のプロセスである」と述べる。「そこにおいてはじめて空間の可能性がひらかれるのだ。すなわち、主体の位置確定(「全ならぬもの」)の可能性が創始されるのである」。ここでは、空間の実践はすべからず原初の分離

のプロセスの反復として理解されるといわれている。この原初の分離とは、無意識と言語活動そのものが一挙に成立し、言語秩序への参入によって(自我)が未分化な身体から疎隔される出来事をさしている。それは同時に、最初に空間の可能性がひらかれた時点、主体の位置確定の可能性が創始された瞬間でもある。ド・セルトーは同じ箇所で、フロイトの有名な観察、すなわち生後十八ヶ月の男の子による「糸巻き遊び」の観察を引きあいに出している。男の子は、糸巻きを遠くに放り投げて見えなくなると、オーオー(Ou)「なくなつた」と嬉しそうに声をあげ、糸を引っ張りたぐりよせては、アーアー(Ah)「もどつてきた」と言葉を発していた。言語活動との関連では、この糸巻き遊びの操作は言語秩序への参入プロセスと理解されるが、空間論の文脈では、これはひとつの「原初的な空間構造」の表現として把握される。言いかえればそれは、「不在を基礎にした位置確定」としての「空間へのとらわれ」へのプロセスにはかならない。空間を実践することは、そうした原初の空間体験を歓喜とともに反復することなのである(de Certeau 1980=一九八七: 230-2)。

6 遊歩の弁証法へ

みてきたように、三つの作用はいずれも無意識の一次過程における言語活動と密接な関連をもっている。それでは、こ

のように無意識的な象徴機構が都市空間で作用するという論点は、ド・セルトーの議論全体のうちでいかなる意義をもっているのだろうか。彼はなぜわざわざ、抵抗的な歩行の実践について考察したのちに、空間の実践に内在する無意識の作用に言及しているのであろうか。まず確認すべき点は、彼は都市空間と歩行者とのかかわりのうちに三つの要素を認めているということである。第一に、都市計画的な合理的システム。第二に、抵抗的な空間の実践。そして第三に、無意識的な象徴機構。このように三つの要素を整理して判明するのは、

ド・セルトーの目標は、たしかに空間の実践のうちに抵抗的な契機をみいだすことであるが、その論証過程はじつのところ、二つの段階で構成されているという事実である。ひとつは、合理的システムを逃れる抵抗的实践という段階であり、もうひとつは、合理的システムから逸脱する無意識的なものという段階である。この二つの段階の差異は、言語活動との類比関係にあてはめてみると、より判然とする。第一の段階では、言語規範(ラング)を自由に使いこなす発話行為(パロール)という側面に、抵抗ないし主体性の関与する契機をもとめている。それにたいして第二の段階では、言語的秩序(二次過程)から脱落し、固定的な意味を喪失した謎のイメージの散乱(一次過程)という側面に、閉塞した秩序から逸脱する契機を認めている。いずれも合理的システムを逃れる契機であることに違いはないのだが、その方向性はおおきく

異なっている。いうなれば、水平的な方向と垂直的な方向との差異と表現することができるだろう。

注意すべきは、二つの段階で想定される歩行者の姿がまるで異なっている点である。第一の段階では街路を歩く者は、主体としての権能を十全に保持した人物として浮かびあがる。軽やかに都市のグリッドを横断する、創意と抵抗性を兼ねそなえた人物像である。ところが第二の段階では、歩行者は、そうした主体性を喪失した無力な人物としてあらわれる。都市を歩く者は、街路の名前に魅惑され、見知らぬ路地へとふらふらと入りこむ。あるいは、ふと湧きあがってきた場所の記憶にとらわれ、その場に立ちつくす。ようするに歩行者はそこで、主体としての権能を一時的に剥奪され、無意識にさらされた人物像として登場するのである。しかし重要なのは、このようにネガティブな要素にいろどられた歩行者をも、ド・セルトーは抵抗的实践を果たす人物として認めている点である。「信じられるもの」「記憶にのこるもの」「原初のもの」という三つの作用は、都市空間の支配的な合理的秩序のうちに欠如や空虚、不明瞭な暗所をつくりだす。無意識的な象徴機構の力により、夢見るように「歩かされる」なかで歩行者は、まさにその受動性を介して、システムの固定的な秩序を逸脱している。歩行者は都市の無意識の作用する場所で、一時的に主体性を喪失するのだが、その不能性においてこそ発現する一種の抵抗性を、ド・セルトーは慎重に引きだし称揚

しているのである。

では、ド・セルトールはこの第二の段階を付け加えることで、いったい何を主張したかったのだろうか。換言すれば、なぜ第一の段階だけでは不足だったのだろうか。発話者が発話行為（パロール）を実践するとき、そこにはたしかに、規範的秩序（ラング）が統御しえない変則的な実践が生みだされる可能性がある。そして、それを主体性の発現ないし抵抗的な実践とみなすことは十分できるだろう。しかしながら、精神的分析的な観点からすれば、「無意識は言語活動の条件である」

(Laplanche et Leclaire 1966=一九八六)。つまり、言語活動のあるところには必然的に無意識の作用がつきまとう。言語を使用する者はかならず無意識の作用にとりつかれ、ふと不思議な言葉に気をとられたり、遠く忘れていた記憶に急に襲われたりする。そうした瞬間は、主体の権能が失われる危機的瞬間ではあるけれども、同時にそれは、発話行為とは別の次元での重要な批判的契機とみなすこともできる。二つの段階はしたがって、互いに表裏をなす不可分の関係にあるといつてよい。

とするなら、システムに対抗する抵抗的実践を主題化する場合に、第一の段階だけに注目するのは、ある意味で危険なやりかたであるといえる。言語活動が必然的に無意識をとともなうにもかかわらず、無意識の次元を無視したり、それに鈍感であるならば、思わぬ場面で無意識の作用の陥穽にとらわ

れないともかぎらない。他方でそれはまた、無意識的な言語活動によって切りひらかれる、根底的な批判の可能性をとりのがすことにもつながる。いや、さらに突き詰めるなら、発話行為による言語秩序への抵抗という側面だけを焦点化することは、無意識的なものによる批判的契機を積極的に隠蔽する行為にほかならず、結局のところ規範的な秩序をむしろ温存し、強化するという逆説的な効果をもたらしているともいえるのである。

*

ド・セルトールにおける歩行者の二つの側面、自在な歩行を抵抗的実践として繰りだす積極的歩行者と、謎のイメージに惹きつけられる受動的歩行者とは、それぞれベンヤミンの遊歩者をもつ二つの側面、「観察者」と「陶醉者」とに対応している。そして無意識的な機制が作用する場としての都市空間のありようは、ベンヤミンの遊歩者が経験する街路空間と——具体的様相という面でも、理論的脈絡という面でも——ひじょうに近接した関係にあるといえることができる。いずれの見方も、精神分析における無意識系の一次過程が処理するイメージの問題、本稿で〈夢||断片的イメージ〉と呼んできた理論的文脈に深い関連をもっているのである。それゆえベンヤミンの陶醉する遊歩者という主題は、たんにベンヤミン個人の特異な着想というにとどまらず、より普遍的な地平で——それは、さしあたりは精神分析という共通項のもとで照ら

しだされる地平である——都市経験の理解に寄与しうる、理論的可能性を秘めているのだということが出来る。

*

本稿が主張する方向性は「観察者」から「陶醉者」へ、というものであった。しかしこれは、従来には見逃されてきた陶酔的な都市経験を前景化しつつ、その理論的な意義を正面からとらえる必要性を訴えるための、いわばスローガンの表現であり、都市経験の主体として「陶醉者」のほうに優れているとか、望ましいとかいう評価的な意味合いはそこには含まれていない。さらにいうなら、もしも「観察者」としての遊歩者像を一面的な把握として切り捨て、「陶醉者」だけを理想的なありかたとして称揚するとすれば、それは理論的にも実践的にも危うい振るまいであるといえよう。

ベンヤミンは「シュルレアリスム」(1930)において、陶酔の力を「世俗的啓示」をもたらすものとして肯定的に論じている。「陶酔のもつもろもろの力を、革命の味方につけること——これこそがシュルレアリスムのあらゆる本や企ての中心問題である」。しかしそのすぐあとに、急いでベンヤミンは限定をつけくわえている。すなわち陶酔をロマンティックにとらえ、非弁証法的に、媒介なしにそれじたいを強調することは、かえって否定的な帰結をもたらすであろう、と。「つまり謎めいたものの謎めいた面をパセティックに、あるいはフアナティックに強調しても、なんら先へ進むことにはならない」

(II: 307)。それにつづけてベンヤミンはいう。

むしろ私たちは、秘密を日常的なものなかに再認する程度に忠じてのみ、その秘密を見抜くことになるのである。そのさい私たちが援用するのは、日常的なものを謎めいたものとして、謎めいたものを日常的なものとして認識するような、弁証法的な光学である。「……」阿片使用者、夢見る人、陶酔した人と同じく、読者、思考する人、待つ人、遊歩者も、啓示を受けた人間のさまざまタイプである。しかも先の人びとよりもさらに世俗的である。(II: 307-8)

ここでベンヤミンのいう、日常的なものを謎として、謎めいたものを日常的なものとして認識するような「弁証法的な光学」は、少し変形すると「遊歩の弁証法」として応用できるのではないだろうか。つまり、日常的なものを認識するのが、距離を介した対象を志向的に把持する「観察者」であり、謎めいたものをとらえるのが、阿片吸引者ないしは子供のような知覚様式をもつ「陶醉者」であるとするれば、「観察者」と「陶醉者」という二つのモードを弁証法的に切り替えて、都市の街路を遊歩するというありかたこそが、「世俗的啓示」をもたらす「遊歩の弁証法」であるといえるのではないだろうか。一方では、透明な記号で埋めつくされた凡庸な都市空間に、

判じ絵めいた不可思議な形象をみつけだすこと。聴きとりにくいささやき声や、何ごとかのかすかなしるしを、あえて日常のうちに探してみることに。他方では、痕跡や亡霊的なイメージに喚起された陶酔的な経験から、うまく日常に帰還すること。都市の〈存在〉に触れた感触を体に残しつつ、あらためて日常的な現実へのぞむこと。陶酔なき「観察者」は日常的な世界を閉塞させ、枯渇させ、面白みのないものにしてしまうだろう。かたや志向性なき「陶酔者」は、夢のような幻想の世界に逃避し、内閉し、場合によっては倒錯的な帰結にいたることとなるだろう。

「真理はなにか生けるものになるが、このように真理が生きるには、命題と反対命題が相互に入れ替わることによって、相互に思考の対象としあうようなリズムのなかでのみである」(V: 526 [Mia, 1])。街路＝ストリートという場所で、何ものかの生きた真理に触れようとする研究者＝遊歩者の足どりは、そうしたリズム、遊歩の弁証法というリズムを刻んでいるにちがいない。

参考・引用文献

ベンヤミンの著作は以下の全集による。

Walter Benjamin, *Gesammelte Schriften I, II, III, IV, V, VI, VII, Frankfurt am Main, Suhrkamp, 1974-1989.*

全集からの引用部分には、ローマ数字による巻数と頁数のみを記した(例: 123)。ただし『パサーージュ論』(全集第V巻)からの引用については、該当す

る断片番号も付記した(例 V: 524 [M, 1])。邦訳は邦語文献を参照し、部分的に訳語を変更した。

de Certeau, Michel, 1980, *Art de Faire*, Paris: Union Generale d'Éditions.

(一九八七) 山田登世子訳『日常の実践のポイエティック』(国文社)

Freud, Sigmund, 1900, *Die Traumdeutung*. (一九六九) 高橋義孝訳『夢判

断』(上・下) 新潮社)

——, 1915, *Das Unbewusste*. (一九七〇) 井村恒郎・小此木啓吾他訳

『無意識について』『フロイト著作集 第六巻』(人文書院)

Frisby, David, 1985, *Fragments of Modernity: Theories of Modernity in*

the Work of Simmel, Kracauer, and Benjamin. Cambridge: Polity Press.

Laplanche, Jean et Serge Leclaire, 1966, 'L'Inconscient, une étude

psychanalytique', Henri Ey (Dir.), *L'Inconscient (Vie Colloque de*

Bonnervil). Paris: Desclée de Brouwer. (一九八六) 大橋博司監訳『無

意識——精神分析的試論』(無意識)二巻、(金剛出版)

Lefebvre, Henri, 1974, *La Production de l'espace*. Paris: Anthropos.

(一九〇〇) 齊藤日出治訳『空間の生産』(青木書店)

Menningshaus, Winfried, 1986, *Schnellenkunde Walter Benjamins Passage*

Des Mythos. Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag. (二〇〇〇) 伊藤

秀一訳『敷居学——ベンヤミンの神話のパサーージュ』(現代思潮新社)

道旗泰三、一九九七、『ベンヤミン解説』(白水社)。

Simmel, Georg, 1903, *Die Großstädte und Geistesleben*. (一九九九)

川村二郎編訳『大都市と精神生活』(シムメル・エッセイ集) 平凡社)

若林幹夫、一九九九、『都市のアレゴリー』(INAX出版)。

Weigel, Sigrid, 1996, *Body-and Image-Space: Re-reading Walter Benjamin*.

London: Routledge.

※本稿は、近森高明(二〇〇五)『ベンヤミンの迷宮都市——都市のモダニティと陶酔経験』(京都大学大学院文学研究科平成十六年度博士課程学位論文)の一部(第I・II・III・VII章)に加筆修正したものである。